

|                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | グスタフ・ヴィネケン男女共学論の危うさ：「客観精神」論と戦争論の繋がりに着目して                                                                                                                                                                                                                                                            |
| Sub Title        | The dangers of Gustav Wyneken's theory of coeducation : focusing on the connection between the theory of "objective spirit" and the theory of war<br>Die Gefahren von Gustav Wynekens Theorie der Koedukation : Fokussierung auf die Verbindung zwischen Objektivengeiststheorie und Kriegtstheorie |
| Author           | 寒河江, 陽(Sagae, Noboru)                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| Publisher        | 慶應義塾大学独文学研究室                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| Publication year | 2025                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| Jtitle           | 研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.41 (2025. 3) ,p.1- 34                                                                                                                                                                                                                                     |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| Notes            | 論文                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20250331-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20250331-0001</a>                                                                                   |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# グスタフ・ヴィネケン男女共学論の危うさ<sup>1)</sup>

「客観精神」論と戦争論の繋がりに着目して

寒河江陽

## はじめに

ドイツ第二帝政期末からワイマール期にかけて、従来の帝国主義的教育体制を批判し、多様な理論的・実践的企図を展開したとされる「改革教育運動 (Reformpädagogische Bewegung)」には、その評価に常に両義性が付きまとう。すなわち、既存の教育体制に対して相対的な「進歩的」側面を持ちながらも、帝国主義的な要請に対する「反動的」側面の併存である。<sup>2)</sup> こうした二面性から一方では社会批判を展開し、他方では戦争賛美を行ったグスタフ・ヴィネケン (1875-1964) は、改革教育運動の極致に達した典型例として見做される傾向にある。ただし、本稿で焦点を当てる彼の唱えた「男女共学」論そのものが、理論的にも実践的にもそうした二面性を持っていたかについては疑問の余地が残る。

これまでヴィネケンの「男女共学」論には、大きく二つの評価がなされてきた。第1には、ヴィネケンに近代教育制度への妥当な批判を行ったという肯定的な評価を下すものである。例えば、ヴィネケンと同時代を生きたKarsen (1923) などがこれに当てはまる。<sup>3)</sup> 最近では、Kupffer (1970)

- 
- 1) 本稿は、2023 年第 66 回教育哲学会における口頭発表原稿「グスタフ・ヴィネケンの教育思想—男女共学論とその失敗を手がかりに—」に全面的な加筆修正を加えたものである。
  - 2) Vgl. Rohrs, H., Die Reformpädagogik, Hannover 1980, S. 13f. Giinther, K. H., u. a., Geschichte der Erziehung, 1973, S. 423ff.
  - 3) Vgl. Fritz Karsen: Deutsche Versuchsschulen der Gegenwart und ihre Probleme. Leipzig 1923, darin S. 74-84: Wickersdorf.

はヴィネケンを「1910年から1930年までの教育的、イデオロギー的、文化的、文化・政治的運動の中で傑出した人物」<sup>4)</sup>と評している。第2には、ヴィネケンは改革教育運動の「負の側面」をも担っていたとするものである。つまり、教育をいわば性犯罪の隠れ蓑とした人物として、また、改革教育運動そのものが持っていた「性」に対する誤った行動の事例として、ヴィネケンの名前が挙がる<sup>5)</sup>のである。こうした第1、第2の論点を総合的に分析するものとして、近年では、ヴィネケンの生涯を通した思想の分析がなされるようになっていく。<sup>6)</sup>加えて、Dahlke(2006)による20世紀初頭の「男性性」研究では、ヴィネケンの「男性」概念について詳細な分析もなされている。<sup>7)</sup>

しかし、これまでの先行研究では、ヴィネケンの「男女共学」に関する記述はあるものの、あくまで「男女共学」に焦点を当てるものであり、彼が「男女共学と性教育」と「客観精神」論<sup>8)</sup>を記している事実は等閑視さ

---

4) Vgl. Heinrich Kupffer: Gustav Wyneken 1875-1964. Stuttgart u. Klett 1970, S. 9ff.

5) Vgl. Jürgen Oelkers: Eros und Herrschaft. Die dunklen Seiten der Reformpädagogik. Weinheim u. Basel 2011, S. 224-252. こうした見解は Dudek (2009) にも見られる。Vgl. Peter Dudek: „Versuchsacker für eine neue Jugend“ – Die Freie Schulgemeinde Wickersdorf 1906-1945, Verlag Julius Klinkhardt, Bad Heilbrunn 2009.

6) ヴィネケンに関する伝記的研究については、以下に挙げる Dudek による詳細な研究が挙げられる。Peter Dudek: FetischJugend. Walter Benjamin und Siegfried Bernfeld. Jugendprotest am Vorabend des Ersten Weltkrieges, Bad Heilbrunn 2002. Peter Dudek: „So arm an Geist, Witz und Charakter.“ Friedrich Wilhelm Foresters Kritik an Gustav Wyneken und der Jugendbewegung. Jahrbuch des Archivs der deutschen Jugendbewegung, Band 19/ 1999-2001. Schwaibach/Ts. 2004. Peter Dudek: „Versuchsacker für eine neue Jugend“ – Die Freie Schulgemeinde Wickersdorf 1906-1945, Bad Heilbrunn 2009. Peter Dudek: „Sie sind und bleiben eben der alte abstrakte Ideologe!“ Der Reformpädagoge Gustav Wyneken (1875-1964) – Eine Biographie. Bad Heilbrunn 2017.

7) Vgl. Birgit Dahlke: Jüngling der Moderne. Jugendkult und Männlichkeit in der Literatur um 1900.

8) 1908年の第1学校年鑑の巻頭論文1. Die neue Schulgesinnung には、「男女共学と性教育」(Koedukation und Sexualerziehung) と全く同じ文章が含まれて

れているように思われる。すなわち、ヴィネケンは男女共学において「性教育」が必須条件だと考えており、その理論的支柱として「客観精神」論があったにもかかわらず、これらの理論的繋がりについて示している論文は少ないのである。<sup>9)</sup>さらに言えば、こうした「男女共学」がヴィネケンの戦争賛美とどのように繋がるのかという先行研究も管見の限り見当たらない。例えば、ヴィネケンは、大戦の勃発が「人間と人間の生存競争」を終結させ「国内における平和体験」<sup>10)</sup>をもたらすとして、戦争に肯定的

---

いる。第1学校年鑑の巻頭論文が男女共学と性教育に関するものであり、第2学校年鑑の巻頭論文が「客観精神」論である。このように、ヴィネケンの目論見は、論集の構造からしても、最初からこの「客観精神」と「男女共学」に向けられていたのである。ヴィネケンが、『学校と青年文化』(1913)を編む際、Die neue Schulgesinnung から独立させたと推測できる。

- 9) ヴィッカーズドルフの100年記念論集を参照せよ。これらには、ヴィネケンが男女共学について唱えていたとする一文程度の言及はあるものの、男女共学と性教育の関係、「客観精神」論、男女共学論と戦争の繋がりについて包括的に扱った記述はない。Vgl. Historische Jugendforschung, Jahrbuch des Archivs der deutschen Jugendbewegung, Die Freie Schulgemeinde Wickersdorf, NF 3. Band, Schwalbach 2007.

- Hartmut Alphei: „Wickersdorf“: Kulturort-Lebensort-Erinnerungsort, Ein autobiographischer Rückblick auf meine Prägung durch Jugendbewegung und Reformpädagogik.

- Hartmut Alphei u. Ulrich Herrmann: „Zurück zur Natur“-„Vorwärts zum Geist“: 100 Jahre Wickersdorf, Eine Vergegenwärtigung von Werke und Wirkung Gustav Wyneken-.

- Hartmut Alphei u. Ulrich Herrmann: 100 Jahre Wickersdorf. Eine kritische Vergegenwärtigung des Wollens und Wirkens von Gustav Wyneken und der Freien Schulgemeinde Wickersdorf.

- Ulrich Herrmann: Das Prinzip Wickersdorf: Freie Schulgemeinde als „Burg der Jugend“ und Jugendkultur durch „Dienst am Geist“.

- Ulrich Herrmann: „Zurück zur Natur“ und „Vorwärts zum Geist“ Das Janusgesicht der deutschen Jugendbewegung.

- Justus H. Urbricht: „Kernland“-„Herzland“-„Neuland“ Thüringen um 1900 als Laboratorium der Moderne.

- 10) Gustav Wyneken: Der Krieg und die Jugend. München 1915, S. 17-19.

な態度を示すようになる。<sup>11)</sup>したがって本稿は、ヴィネケンの男女共学論における「若者像」が、1915年に書かれた「戦争と若者」(1915)における「兵士像」と通底すると示すことを目的とする。それにより男女共学を唱え、抑圧されている若者を文化の創造者にするというヴィネケンの改革教育思想が、最終的には、女性を男性化させ、若者を兵士として国家体制に組み込み、弱者を強者に従属させる思想に帰着したと示すことができよう。このように、ヴィネケンの男女共学論が人間を兵士へと画一化する戦争とどのように接続するのかを彼の諸論文から分析を施すことによって、なぜヴィネケンの論が多くの若者を惹きつけたのか、同時に、それが戦争に肯定的な態度をとることに行き着く理由を明らかにできるであろう。

まず、グスタフ・ヴィネケンについて簡単に紹介しておく。ヴィネケンは、1875年3月19日にシュターデの牧師の家に生まれ、1964年12月8日にゲッティンゲンで没した。1898年、グライフスヴァルト大学に「ヘーゲルのカント批判」という博士論文を提出しており、ヘーゲルを用いた教育論を旨としていた。彼は例えば、『学校と青年文化』(1913)や『新しい青年』(1914)といった著作を残している。彼はまた、ドイツの改革派教育学者かつ教育実践家でもあり、全寮制の寄宿学校、ドイツ初の男女共学校である「ヴィッカーズドルフ自由学校共同体」(1906年創立、1932年に廃校。以下、FSGと略記)の創設者である。1913年にホーエ・マイスナーで開催された「第1回自由ドイツ青年の日」では、ヴィネケンがドイツ青年運動の中心的役割を果たしたこともあった。こうした近代教育の批判者としてのヴィネケン派に、若きヴァルター・ベンヤミンが所属していたことは知られている。

ヴィネケンは、改革教育運動家として近代教育制度批判と、「新しい文

---

11) Telsnig (2014) は次のことを指摘している。ハウビンダ田園教育舎において軍事演習を行うことに反対していた教師は、ヴィネケンとルゼルクの二人だけだった。Vgl. Florian Telsnig: Das Aufbegehren der Jugend gegen die Kriegsbegeisterung ihrer Lehrer: Benjamin – Wyneken, Scholem – Buber, Kraft – Borchardt. In: Yearbook for European Jewish Literature Studies. Walter de Gruyter, Berlin 2014.

化の創造」という主張を行っていた。例えば、ヴィネケン派に属していたベンヤミンは「自由学校共同体」という小論考<sup>12)</sup>を1911年に書き<sup>13)</sup>、ここでは引用された「男女共学と性教育」(1913)の文言を記している。たしかにヴィネケンを支持していた時期のベンヤミンもそれ以後のベンヤミンも「男女共学と性教育」の全く同一の文章を引用しているのだから、彼のヴィネケン理解には一貫性があると言えよう。<sup>14)</sup>しかし、ベンヤミンは、1914年5月23日にヴィネケンの『学校と青年文化』を再読するよう友人に提案し、「客観精神」に「間違った基礎づけとは別の何かはまだひそんでいる」と批判し始める。<sup>15)</sup>このように、1911年から1914年の約3年間の間に、ベンヤミンのヴィネケンに対する評価は180度変わっている。つまり男女共学に関するヴィネケンの発想を保持しつつ、その「客観精神」の圏域から離脱するのである。結論から先に述べると、ヴィネケンの言う客観精神と「若者への裏切り」そして戦争肯定との間には、客観精神論を土台とした男女共学論と、客観精神論がもたらす戦争賛美にある種の共存関係にあると若者たちは見た可能性が高いのである。

本稿は以下のように進む。まず、ヴィネケンが「新しい文化の創造」を主張した理由として、若者が社会的に抑圧され、若者独自の文化を生み出せない社会状況、教育状況があることを説明する(第1節)。次に、「新し

---

12) ベンヤミンはこの小論考で、「ヴィッカーズドルフの年報」と「自由学校共同体の第2年鑑」を参照している。どの年報(Jahresbericht)を参照したかは不明だが、時期からして第1年報、第2年報は参照していると考えられる。“Erster Jahresbericht der Freien Schulgemeinde Wickersdorf”(1906-1908). “Zweiter Jahresbericht der Freien Schulgemeinde Wickersdorf”(1908-1910). 第2年報にはシュビッテラーがヴィッカーズドルフを訪問したという記述があり(S. 49)、ベンヤミンの小論考と部分的に一致する。

13) Mićko (2010) は、「ヴィネケンの「客観精神」の考え方が(中略)中心になって」いると位置付けている。(Vgl. Marian Mićko: Walter Benjamin und Georg Simmel. Wiesbaden 2010, S. 53.)。

14) 今井康雄：ヴァルター・ベンヤミンの教育思想 メディアのなかの教育(世織書房), 1998, 47 頁。

15) GB I, S. 231. = 『ベンヤミン著作集』14, 61 頁。

い文化の創造」の理論的説明にあたる客観精神論を概説しつつ、なぜヴィネケンが若者を必要とし、男女共学の学校を求めたのかを明らかにする（第2節）。最後に、ヴィネケンが唱えた理論の帰結が、第1に戦争賛美と青年を戦争へ駆り立てたこと、第2に男子生徒への性的暴行事件による逮捕であると確認する（第3節）。

### 第1節 若者文化の不在と古い価値観の支配

ヴィネケンとは、人間が文化の担い手になることを求めるなかで、既存の文化の分厚さに個人が抑圧される事態を問題視していた。彼にとって、この事態は、既存の文化や社会規範を家庭や学校で押し付けられる若者たちが、若者独自の文化を持てない問題として再定義されている。

#### (1) 新しい文化の創造という課題

ヴィネケンの目的が「新しい文化の創造」にあるということは、1906年のFSGのパンフレットに端的に表れている。これは、FSG創立の年であり、最初の学校年報が書かれた年である。つまり、ヴィネケンの改革教育運動に関わる諸作の中でも、彼の目的が色濃く反映されているものである。

世界中の教育が古い伝統の束縛からどんどん解放されているとすれば、私たちは科学的な信念に自由に従うことができるという有利な立場にあると言えます。（…）私たちは、新しい文化の創造という現代の課題を解決するために、過去の文化を研究することの価値を認識していないわけではありません。（傍点は筆者）<sup>16)</sup>

そしてこの「新しい文化の創造」のために、学校教育の第一の課題を「すべての人に共通する教育、つまり文化全体に参加することを教えること」<sup>17)</sup>だ

---

16) Gustav Wyneken: Programm der Freien Schul-Gemeinde Wickersdorf, 1906, S. 2. ヴィネケンは、Eugen Diederichs社と提携しており、彼の著作の多くはそこから出版されているが、これはパンフレットであるため、出版社不明である。

17) Gustav Wyneken: Die neue Schulbildung. In: Gustav Wyneken: Schule und

とする。ヴィネケンは決して、一部の人間だけが文化創造に関与すればよいとは考えず、すべての人間が文化に関与するべきだと考えていた。科学の進歩によって、例えば心理学の発達から<sup>18)</sup>、教育がますます科学的になることによって、新しい文化の創造も果たせると考えてもいた。では、なぜヴィネケンは、新しい学校を創ってまで、新しい文化の創造を訴えたのか。そこには、彼の従来の学校教育に対する一貫した批判と文化の分厚さに対する恐怖心があったと言えるのである。

## (2) 学校教育・家庭教育への批判

では、彼の学校教育に対する一貫した批判とはどのようなものか。1911年に書かれた「迷信」では、「進級できなかった生徒がみずからその命を絶ってしまうという事件は、若い人々の目からみても、思春期におこるごく普通の現象になり始めている」<sup>19)</sup>と驚きをもって語っている。ヴィネケンにとって、生徒が学校生活のために自殺する状況は許せるものではなかった。自殺の原因は、そもそも青年期の若者が「最も感じやすい性格の持ち主であり、最も繊細な扱いを求めている」<sup>20)</sup>のに対し、学校はあくまで「世才にたけた」人物になることを求めるという目的の違いにある。つまり、第1に「学校が自分たちの「精神」に訴えるものではない」く、第2に「「世才にたけた」こととは全然別の、それ以上の存在となる可能性をもっているかもしれない者たち」<sup>21)</sup>を蔑ろにしているのである。前者について、「新しい学校教育」(1909)には、精神に訴えるものではない教育の筆頭に、古典ギリシア語とラテン語を教える古典語教育が挙げられている。本来で

---

Jugendkultur. 1. Aufl., Leipzig 1913, S. 117.

18) Geissler (1963) は、「ヴィネケンの考察は、発達心理学からのいくつかの観察にも基づいている」ことを指摘している。(Erich E. Geissler: Der Gedanke der Jugend bei Gustav Wyneken. Heft 1 der Forschungen zur Pädagogik und Geistesgeschichte. Frankfurt am Main/Berlin/Bonn 1963, S. 51.)

19) 鈴木聡：青年期の教育（明治図書出版株式会社）世界新教育運動選集 18, 1986, 115 頁。

20) 同上、116 頁。

21) 鈴木、前掲書、116 頁参照。



あれば、椅子に何時間も縛られながら、いつ使うことになるかも分からない古典語に精を出すよりも別のやるべきことがあるにもかかわらず、古典的な文化が大事であるという古い価値観によって、それが叶わないとヴィネケン は診断している。ヴィネケン は、学校教育の誤った目的を以下のよう に記している。

教育とは、若者（die Jugend）の個人的意識を社会的意識に統合することであると定義するならば、若者はまず、補わなければならない欠陥や不完全さ、克服しなければならない抑制の総体として現れる。教育とは、子供らしさとの闘いであり、子供らしさの破壊でもあり、大人の優越性の主張であり、老いであり、大人化である。<sup>22)</sup>

ヴィネケン はここでは、教育の結果、「彼ら自身の命は何の意味もなく、社会的な目的のために無慈悲に犠牲にされた」<sup>23)</sup>、すなわち若者が持っている本来の個性が破壊されてしまったと考えている。若者が犠牲に供される理由は、教育の目的が「生存のための経済的闘争を効率的に尊重すること」にあり、「社会や国家が完全に経済的な生存競争の看板の下にある限り、若者は存在せず、若者の奴隷化は続く」。<sup>24)</sup> すなわち経済原理によって学校は単に若者を資本主義社会に同化動員させる機能しか果たさないのである。まとめるならば、学校は「若者が生きる意欲や力を喪失していることに加担」<sup>25)</sup>しているのである。このような状況は、「かつての学校」では起こりようがなかった。それは「われわれの文化生活が、この30年

---

22) Gustav Wyneken: Die Jugend. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 33. 本稿では Die Jugend を「若者」と訳しているが、ヴィネケン研究においてもベンヤミン研究においても「青年」と訳することが一般的である。しかし、本稿では以下に示すように、青年は「男女」を含む概念として強調するために「若者」と記す。

23) Gustav Wyneken: Die Jugend. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 33.

24) Ebd., S. 34.

25) 鈴木聡：青年期の教育（明治図書出版株式会社）世界新教育運動選集 18, 1986, 117 頁。

間にかつてのどの100年間にもみられなかったほどに変化し発展した」<sup>26)</sup>からであり、社会や科学技術の発展の影響を無視しては、教育改革は意味を持たなくなったからである。そこからヴィネケンは、「性格や観念の固定化した形式を30年以上も前に身に着けた教師」が教育を行えるはずがなく、そこでは「新しい生命の生まれるはずがない」<sup>27)</sup>という結論を下すのである。

次に、ヴィネケンの述べる文化の分厚さに対する恐怖心とは何なのかを明らかにしたい。この概念は、端的に言えば、家庭教育と学校教育が持つ根深い関係のせいで、新しい文化の創造がなされ得ないことを指している。これをヴィネケンは、家庭が学校に対して「学校の外にも生活がある」<sup>28)</sup>ことを見せない家族制度に問題があると考え。家族とはヴィネケンにとって、一方では性の繁栄に奉仕し、他方では国民経済において個人の財産を管理し、消費を組織するという任務を持つ制度である。しかし、この2つの特徴から「現代の若者は、まず家族の中で育てられ、世話をされるが、実際の教育が始まる年齢までは、家族の中でしか育たない」<sup>29)</sup>とするのである。このように、家庭教育の後すぐに学校教育が続き、そこで経済的闘争への参入を求められる。それらはいずれも家族の制度と地続きである。これでは、必然的に家庭と学校以外の文化に触れることはできず、若者が新しい価値観に出会う場が存在しない。それはつまり、保守的な価値観の再生産が行われ続けることを意味している。

上記のような古い価値観に束縛された学校教育と家庭教育が支配的になると何が起こるのか。それは、第1に、青年期の性本能の抑圧である。ヴィネケンは、青年のエロスが抑圧されている状況を問題視していた。「青年運動の世界史的意義（Der Weltgeschichtliche Sinn der Jugendbewegung, 1916）には以下の記述がある。

---

26) 同上、117 頁。

27) 鈴木、前掲書、117 頁参照。

28) 鈴木、前掲書、119 頁参照。

29) Gustav Wyneken: Familienerziehung. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 13.

若者は、開始されるべき男女間の関係として、性的禁欲と同志愛を告白する以外のエロティックな方向転換を（消えつつある例外を除いて、すなわち「始まり」においては）まだ見つけていない。半ば暗闇に追放されたエロスは、病んで悪性化し、文化が育たず、文化を培養できないのである。<sup>30)</sup>

思春期の若者に備わっているものとして、性的本能がある。だがこれは教育の俎上に挙がることはあまりない。当時の家庭教育や学校教育では、基本的には「禁欲主義」が奨励され、またキリスト教の影響も相まって、性的本能はあってはならないものとされた。<sup>31)</sup> 少年少女たちは、それらを無いものとして育てられる。それゆえ、なるべく男女が双方の存在を意識しないように、男子校や女子校といった男女を分けて育てる教育が行われたのである。しかしこのような状況では、性的抑圧が抑圧されない自然に発揮された男女関係を築くことはできず、自分の性的志向についても、同性に対する友情として錯覚される可能性がある。

第2に、「男女共学と性教育」<sup>32)</sup>においてヴィネケンは、家庭教育と学校教育の深い繋がりによって、女性教育の遅れが起こると考えた。既存の男女の教育は、端的にゲーテが「男子（Knaben）には召使になるように、女子には母親になるように教育しなさい」<sup>33)</sup>と示したような、性差本質主義的かつ女性蔑視に立脚したものだった。<sup>34)</sup> ヴィネケンは、このゲーテの言葉を批判する。特に、女性が母になる教育をやり玉に挙げている。男子が、学校で職業訓練を受けるのに対し、女性は、先進的と言われる教育機関でさえ「家庭科や保育」といった母親になるための教育を受けるとヴィネケンは述べる。<sup>35)</sup> こうして女性は、家庭においても教育においても自

---

30) Gustav Wyneken: Der Weltgeschichtliche Sinn der Jugendbewegung. In: Kampf für Jugend. Gesammelte Aufsätze. Jena 1919, S. 156-7.

31) Vgl. Johannes Steizinger: Revolte, Eros und Sprache. Berlin 2013, S. 153-158.

32) Koedukation und Sexualerziehung. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 44-55.

33) Ebd., S. 44.

34) Ebd., S. 45.

分の人生の選ぶ自由を否定され、文化創造に貢献する生き方を選択できない。<sup>36)</sup> このようにヴィネケンは、近代教育制度に残存している前近代的家族制度によって、女性が抑圧されて文化の創造が妨げられていると考えたのである。

### (3) 近代教育のアンチノミー

これらの問題をヴィネケンは、近代教育の「アンチノミー」<sup>37)</sup>としてまとめている。

教育の基本的な問題、その解決が教育学の実際の内容を形成する問題は、青少年が一方では自分自身の権利、自分自身の人生への権利を持っているが、他方ではこの自分自身の人生から奪い取られ、大人の考え方や生活様式に導入され、知識を与えられ、自分自身の自然な本質とは異なる活動で訓練されるという、大きな反省点である。<sup>38)</sup>

このアンチノミーをヴィネケンは、「自然の要求と文化の要求」(Die Ansprüche der Natur und Kultur)<sup>39)</sup>という言葉で言い換えている。すなわち、若者に

---

35) しかし、当時の中等教育において「家庭科や保育」といった母親になるための教育が行われていたという史的事実は管見の限り見られなかった。例えば、以下に示す書籍には、当時の女性の教育として「数学」や「科学」も行われていたことが記されている。Vgl. Angelika Schaser: *Frauenbewegung in Deutschland 1848-1933*. S. 40. Verlag Helder Breisburg 2020. そのため、ヴィネケンの主張は歴史的事実に耐えるものではないことに注意が必要である。ただし、ヴィネケンが女性解放運動の活動家である Lily Braun (1865-1916) と懇意にしており、彼女の息子である Otto Braun が FSG の生徒であったことは明記しておく。しかしながら、ヴィネケンとリリー・ブラウンとの思想的関係を追うことは本稿の域を超えるため別稿に譲る。

36) Koedukation und Sexualerziehung. In : Wyneken, a. a. O., 1913, S. 45.

37) Gustav Wyneken: *Die Jugend*. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 40.

38) Edb. S.40.

39) Wyneken: a. a. O., S. 40.

固有の価値やその時期特有のエロスの欲求と、文化が若者に課す人間の画一化や再生産との間での矛盾が近代教育の問題なのである。そしてこのアンチノミーは、「文化の進歩とともに、ますます深刻になっていく」<sup>40)</sup>ものである。というのも、「人間社会が言語の出現以来蓄積してきた、科学、芸術、法律、道徳など、世代から世代へと伝えていかなければならない客観的で超個人的な精神的財産の宝は、ますます増大していく」<sup>41)</sup>からである。こうしてますます、若者を縛り付け、かつ若者が従事しなければならない文化は分厚さを増す。<sup>42)</sup>すなわち、教育の場とは、「自然と文化、現在と未来の主張がここでぶつかり合う」<sup>43)</sup>場所、つまり、自然な人間の発達と客観的文化の分厚さが衝突する場所である。ヴィネケンが考える教育は、まさにこのアンチノミーを乗り越え、バランスを取るためのものであった。

ヴィネケンとは、通常は近代教育が持つ「他律」の暴力によって、強制的に解決させられるこれらのアンチノミーを、別様から捉えようとしている。つまりは、近代教育の代案を提示しようとしていたのである。では、どのようにヴィネケンとはこれらのアンチノミーを解消しようとしたのか。結論を先取りすれば、新しい学校の創造と家庭の排除によってである。

次節では、彼が特に家庭と若者の結びつきを問題視しており、家族的関係による弊害は、「女性の社会進出の疎外」にも繋がっていると考えていることを示していきたい。そのため、まずは、ヴィネケンの教育論の骨子である「客観精神」論（『学校と青年文化』所収）<sup>44)</sup>を見ていこう。というのも、これはヴィネケンの思想の根幹をなしているからである。

---

40) Wyneken: a. a. O. S. 40.

41) Wyneken: a. a. O. S. 40.

42) 本稿のこうした見解は、Mičko (2010) と同じくするものである。彼女は、ヴィネケンにおいて「教育の課題」は「目に見えない」客観的な精神の主張、「精神的な財」の伝達、青少年の「適切な権利」の主張を調和させることである、とまとめている。Vgl. Mičko, a. a. O., 2010, S. 52.

43) Gustav Wyneken: Die Jugend. In: Wyneken, a. a. O., 1913 S. 40.

44) Gustav Wyneken: Der „objektive Geist“. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 5-12.

## 第2節 「客観精神」論

ヴィネケンは、どのように自然と文化のアンチノミーの解消を試みたのか。彼はまず、既存の学校が失っている「文化の創造」についての理論の構築を試みる。それが「客観精神」論である。彼は、客観精神を目的として、万人に、性差を問わず文化の担い手である「若者 (die Jugend)」という存在者になることを求めた。そのために男女共学の学校を必要としたのである。この男女共学校は、自然的発展の実現を叶える。このようなヴィネケンの姿勢をベンヤミンは支持し、ヴィネケンと共に改革教育運動に邁進する。だが、ここで重要なのが第一章の冒頭で示したように、両者の間に見られる「客観精神」に対する微妙な差異なのである。以下、(1)では、ヴィネケンの「客観精神」論の説明を、(2)では、青年に関する説明を行う。(3)では、男女共学の理想を、客観精神の観点からまとめる。

### (1) 客観精神<sup>45)</sup>への奉仕

「客観精神」論は、ヴィネケンの教育論の根幹をなしているが、客観精

---

45) 客観精神という概念はヘーゲルから取られたものである。だがヴィネケンは、相当に歪めたヘーゲル理解を行っている。この点、多くの先行研究が、ヴィネケンの教育論がヘーゲル哲学とは大きく内容が異なると報告している。例えば、Kupffer (1970) は、そもそも、「ヴィネケンは当時の典型的な思考パターンから強い影響と刺激を受けたために、その（思想の）独創性に疑問を投げかける傾向」(S. 9.) があると指摘している。ヘーゲル哲学との関係については次のように説明している。「ヘーゲルとヴィネケンの歴史観の違いは、一方ではヘーゲルが現実世界の歴史の中に精神のプロセスを求めるのに対し、ヴィネケンは精神の領域を経験的な歴史の領域から切り離していることにある。一方、ヘーゲルは国家に具現化された「道徳的全体」を見ているが、ヴィネケンはこれに近い関係を見出すことができない」(Vgl.; Heinrich, a. a. O., S. 236.)。この点については、Georgios Sagriotis も同様の結論を下している。「ヴィネケンの教育的・政治的・哲学的プロジェクトの理想主義は(…)哲学史の一局面としてのドイツ観念論との共通点はほとんどない」(Vgl. Georgios Sagriotis: Georg Wilhelm Friedrich Hegel - Eulenflüge. In Ders.: Jessica Nitsche/ Nadine Werner: Entwendungen. Walter Benjamin und seine Quellen. Wilhelm Fink, München 2019, S. 129.)。

神の概念そのものには、明確な定義がない。脚注45にも示している通り、ヴィネケンの論考内部でも論理矛盾をきたしている。しかし、端的に言えば、客観精神とは、文化を生み出すための人間が目指すべき目標といった架空の概念であり、論理的な補助手段である。しかもこの概念は、超個人的で、経験世界には対応していないが実現されなければならない（いわばイデア的な）ものだと言えよう。このようにヴィネケンは、人間がある目標に向かって文化を生み出していると考えている。その目標が客観精神なのである。では、この客観精神は、人間の発達とどのように関連するのか。

ヴィネケンは、人間の生には、3つの段階があり、それぞれの段階に対応する役割があるという。第1段階は、人間の幼年期に当たる。ここで人間は、個別的生物として、「純粹に主観的なもの、快・不快の感情」<sup>46)</sup>に従う動物として生まれる。この第1段階は「言語の習得」<sup>47)</sup>によって終了し、すぐに第2段階へと移行する。というのも、「人類は（…）（言語から）社会的精神を受取るから」である。<sup>48)</sup>第2段階とは、社会的精神を、すなわち言語によって貯えられた意識内容をもつ段階である。そこでは、言語により意識の客観的形式が獲得され、これによって自己や他者を認識し、交流が図られるようになる。そして、第3段階へと入る。この第3段階では、この社会的精神が客観的な形を伴うようになり、「科学、芸術、法律、道徳など（…）客観的で超個人的な精神的財の宝」<sup>49)</sup>になる。このような社会的財をヴィネケンは、「精神文化（die geistige Kultur）」<sup>50)</sup>と呼ぶ。言語において社会精神が客観化、超個人化され、文化はそれを具現化したものとして立ち現われる。そして客観精神は、文化創造の際の目標であると同時に、文化を生み出すための基盤的指針となる。このように、一方では、言語によって社会的財である文化が造られ、他方では、文化によって個人

---

46) Gustav Wyneken: Der „objektive Geist“. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 5.

47) Ebd.

48) Wyneken: a. a. O. S. 5.

49) Gustav Wyneken: Persönlichkeitserziehung. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 21.

50) 別の論考では、「我々の精神的な精神的財産のシステム」と呼んでいる。（Vgl. Gustav Wyneken: Die Schule. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 64.）



が形成される。この観点からすれば、個人と文化の関係は、円環構造をなしていると言えよう。こうした文化を生み出す構造において、文化を主体的に人間が生み出そうとする際には、客観精神へ向かうという個人の姿勢が求められるのである。

ここで、ヴィネケンは、この現実には存在しない客観的な「精神への奉仕」が個人の、個々の精神のなすべき仕事であると考え。彼によれば、客観精神への奉仕というさらに高い目標について、「人間は目的のための手段でしか」なく、「より高い、絶対的な目標である精神の促進と強化に目を向けることは、教育の最も神聖な義務」<sup>51)</sup>であるという。つまり客観精神は、個人もしくは個人の精神を利用し、客観的な文化を生み出させることによって自己の存続を図るのであり、まさにそのために教育が必要になるのである。さらに言えば、ヴィネケンは、客観精神は、「知性」と「意志」に二分され<sup>52)</sup>、前者は精神文化に対応し、後者は「国家」（客観的意志の体現）に対応するという。しかも、国家は、「個人の意志より上位の意志、ひとつの Soll として対置」<sup>53)</sup>される。個人の意志を超えたところに「国家」がある。そのため、個人と国家は外面的関係にあり、国家が個人の内面にまで立ち入り、これを規定することはない。<sup>54)</sup>個人の内面を規定するのは「道徳」であるが<sup>55)</sup>、これまで道徳的な人間によって国家が形成されることはなかったと判定している。それゆえ、国家の形成においては、ある種の同質的な道徳観を備えた人間が必要だったといえるのである。

以上から明らかなように、ヴィネケンの考える文化の創造は、人間を手段とみなし、一つの絶対的な価値観に個人を指し向け、個々の人間を精神文化に一体化させるものである。<sup>56)</sup>

51) Gustav Wyneken: Staatliche Erziehung. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 56.

52) Wyneken, a. a. O., 1913, S. 8.

53) Ebd., S. 8.

54) Wyneken; a. a. O. S. 11.

55) Ebd., S. 11.

56) この点を、Herrmann (2007) は「人々が自分の個人的な「主観的」精神を「客観的」精神（芸術や宗教）の領域に変え、それによって人類全体のより高い発展のための道具となり、発案者となることに自己献身すること」を通して、



例えば、若きベンヤミンのヴィネケン理解も、部分的にはこの論点に集約される。彼の「自由学校共同体」（1911）では以下の記述が見られる。

すべての理想的な財、言語と科学、法律と道徳、芸術と宗教は、この客観的な精神の表現です。客観的な精神の担い手である人類は、ゆくりとした手間のかかる放浪を経て、今日の高みに到達しました。<sup>57)</sup>

ベンヤミンは、自分たちが築いてきた文化が客観精神の現われであり、その客観精神の担い手は個々人だと唱える。そして彼は、「この客観的な精神に身を置き、最高の財産に関する仕事で自分の義務を果たさなければならない」ことが、「個人の課題（die Aufgabe des Individuums）」<sup>58)</sup>だと考えるのである。このようなことから、Sagriotis（2019）によれば、「ベンヤミンは、個人には『（客観的な）精神の奉仕に身を置く』ことが要求されるという、ヘーゲル哲学に対するヴィネケンの解釈を示している」。つまりこの文脈では、『客観的精神』という言葉には、集団のために個人が自己犠牲を払う必要性と、理想を求めて社会的に確立された境界を越えることの両方を意味するという二重の意味がある」<sup>59)</sup>のである。Mičko（2010）の解釈と照らし合わせるならば、ベンヤミンはこのような自己犠牲を厭わなかったし、他者にも犠牲を要求していたことになる。これは、アドルノ

---

「文化は「精神の奉仕」の中で確立される」とまとめている。Vgl. Hartmut Alpei u. Ulrich Herrmann: 100 Jahre Wickersdorf. Eine kritische Vergegenwärtigung des Wollens und Wirkens von Gustav Wyneken und der Freien Schulgemeinde Wickersdorf. In: Historische Jugendforschung. Jahrbuch des Archivs der deutschen Jugendbewegung. Die Freie Schulgemeinde Wickersdorf. NF 3. Band, Schwalbach 2007, S. 12-15.

57) Walter Benjamin: Gesammelte Schriften. hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser unter Mitarbeit von Christoph Gódde, Henri Lonitz und Gary Smith. Frankfurt am Main VII, S. 10. ここでヴィネケンは、客観精神の現われが文化だとは述べていないことに注意が必要である。

58) Wyneken: a. a. O. S. 11. 原文は以下の通り。„Dienst dieses objektiven Geistes zu stellen und in der Arbeit an den höchsten Gütern seine Pflicht zu erfüllen.“

59) Vgl: Sagriotis, a. a. O., 2019, S. 128-9.

がベンヤミンの往復書簡集の序文に記したように、この時期ベンヤミンが「むだだろうに、ものぐるおしく集団を希求していた」<sup>60)</sup>ことを示すものだろう。まとめれば、ヴィネケンが新しく提示した教育論のモデルである「客観精神」論は、実は人間を一つの目標に向かわせて文化を創造させるものであり、そのためには個人の自己犠牲をも厭わないものなのである。

これまでヴィネケンの「客観精神」論について、ベンヤミンが賛同していた箇所を見てきた。しかし、1914年5月23日付の書簡では、この「客観精神」論に対する批判が見られる。

『学校と青年文化』を一読、もし読んでいるなら再読してくれたまえ。そして熟考してほしい、あの「客観精神」のなかに、間違った基礎づけとは別の何かはまだひそんでいるのか、いないのかを。少なくともぼくは、またぼくとともにいる友人たちは、あの論文でヴィネケンが提示している教育のイメージから、ますます離れていっている。ぼくにはわかる、かれは偉大な教育者、ぼくらの時代にあってはきわめて偉大な教育者だった—たぶんいまもそうだが、かれの理念はかれの眼に較べてもずっと遅れている。<sup>61)</sup>

ここでベンヤミンは、「客観精神」論には、誤った基礎付けに加え、それ以外にも何か不純物が含まれていると警告している。そして、ヴィネケンが提示している教育のイメージから、ベンヤミンは遠ざかっていると告白するのである。この原因には、以下2つのことがあるように思われる。第1に、客観精神が、これまで見てきたような、新しい文化を生み出すための論理的な補助手段ではなく、むしろ既存の精神文化の延長にある凝り固まった特定の精神である可能性が高いということである。第2に、客観精神には、個人を目的のための手段へと転落させ自己犠牲を求める、という抑圧的側面があることである。

---

60) 『ベンヤミン著作集』14, 19頁。

61) 『ベンヤミン著作集』14, 61頁。

## (2) 若者の使命

ヴィネケンの「客観精神」論において、青年期は、第3段階への過渡期に位置付けられる。第2段階で客観的な人間形成を果たした後、「個人は第3の生の時代に入り、この人間になる過程、すなわち第2段階にその客体であった過程の一部」<sup>62)</sup>となる。つまり客観的な価値や客観的な文化を受容する立場から、それらを創造する立場への変換が第2段階と第3段階の決定的な違いである。この過渡期に位置する青年期は、すでに見たように「繊細さ」を持つ時期であり「生の絶対的価値に対して感じ易い時期」であり「理想主義の時期」に相当する。<sup>63)</sup>

青年期は精神が無条件の権利を求めることができる唯一の時期であり、幸福主義にもとづく社会感覚、最大多数の最大幸福をめざす社会感覚ではなく、社会を精神の促進という目的を持った組織とみなす社会感覚が生じうる唯一の時期である。<sup>64)</sup>

精神的な価値を目指すのが若者であり、その若者の活動は社会全体の革新という使命をも担っている。このように理想を追求できる時期にあっては、客観精神への奉仕もまた容易である。そして、「青春の泉を飲み干し、今とは全く違う形で青春の営みに関心を持つ社会は、金利や贅沢に明け暮れる今の社会とは違う価値観を追求するだろう」<sup>65)</sup>とヴィネケンは期待するのである。こうして客観精神と青年を見てきたとき、一つの結論にたどり着く。ヴィネケンは、若者に客観精神への奉仕を通して文化を創造すること、すなわち若者自身がおのれの文化を創造することを求めたのである。しかし、客観精神に奉仕する存在は、あくまでもすでにある、一つの思想のもとに凝り固まっている状態であり、それでは新しい文化の創造は期待で

---

62) Gustav Wyneken: Der „objektive Geist“. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 12.

63) これと同じ記述が「自由学校共同体」(1911)に見られる。

64) Gustav Wyneken: Koedukation und Sexualerziehung. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 46.

65) Gustav Wyneken: Die Jugend. In: Wyneken, a. a. O., S. 42.

きない。また、個々人が精神の実現の場であることを忘れ、ただ奉仕することによって、かえって若さの自覚を失っていることを指摘できるであろう。

では、ヴィネケンが奉仕させようとした客観精神の行く先には、何があったのか。(1)の議論と重ねると、若者による精神への奉仕には落とし穴があることが分かる。すなわち、この若者が目指す文化の内実が語られないまま、若者が文化創造のために手段とされていること、である。第2に、青春を持つ若者であっても、彼らが創造するのはあくまで客観精神論に基づいた「精神文化」であるから、実際には古い言語による社会的精神を具現化した「既存の文化」の延長に過ぎないものであり、未来の文化や作りかけの文化にはならないことである。

### (3) 男女共学の理想

では、「客観精神」論をもとに築かれた男女共学論はどのようなものだったのか。ヴィネケンは、第1節(3)で見た二つの事例、つまり若者のエロスの抑圧と、女性の社会進出の遅れの双方をこの男女共学理論によって解消できると考えた。ヴィネケンは、男女共学の目的を以下のように述べている。

我々は、少年少女が本質的にお互いを仲間（Kamerad）として見なすことを実現したいと思う（すでに部分的には実現している）。そして、まさにこの感覚こそが、あらゆる永続的で価値ある会話の前提条件である高貴な距離感を維持するのだ。<sup>66)</sup>

このように、彼は、少年少女が共に文化の創造という仕事を達成する仲間となるために、男女共学の実施を考えていたのである。

だがここで、高貴な距離感と表される男女関係とは何だろうか。ヴィネケンにとってそれは「自然な関係を築く」<sup>67)</sup>ことであり「青少年におけ

66) Gustav Wyneken: Koedukation und Sexualerziehung. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 49.

67) Ebd., S. 48.

る両性の肯定的な関係」である。つまり、自然の要求であるところの「性的本能」を無視することはあってはならないのである。ヴィネケン、男女が自然な関係をつかむことを主張する（この自然な関係は、同性のエロティックな関係も含まれる）。

ヴィネケンが両性の自然な関係性を主張したのは、理想とされた男女共学に、「早すぎる官能性を打ち消し、若い人たちの関係から不健康な緊張感を取り除くことが期待されてい」<sup>68)</sup>たためである。そこから、家庭生活の理想、もしくは家庭生活の延長上に男女共学があることが求められた。しかし、これは本来的な男女の関係ではない。というのも「それではお互いにエロティックな魅力を感じるができない」<sup>69)</sup>からである。家庭教育の次に学校に通う子供たちに対して「家族が原理的に決して提供できないもの」<sup>70)</sup>を実現することが、ヴィネケンの目標だった。だとすれば、少年も少女もお互いを性的対象として見ることになる。そこからヴィネケンは、男女共学と性的志向の関係の持つ意義を唱える。

必要に迫られたエロスの反転は絶対に避けなければならない。それは、男性のみ、女性のための教育現場では間違いなく起こる。このようにして得られた倒錯が長く続くことを恐れる必要はないにしても、本性に反してそれに支配されている若者には深刻な葛藤が生じ、性本能の残虐化<sup>71)</sup>につながる可能性があるのだ。これが、男女共同教育の重要な理由である。異性のタイプを単に視界から排除してはならず、誰もが自分に合ったエロティックな決断をすることを妨げてはならないのである。<sup>72)</sup>

---

68) Gustav Wyneken: Koedukation und Sexualerziehung. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 47.

69) Ebd., S. 47.

70) Wyneken: a. a. O. S. 47.

71) 川越修『性に病む社会』（1995）によれば、当時、学生の25%が梅毒に感染していた。ペニシリンの開発は1928年だから、死に至る病と考えられていた梅毒を抑制する方法は「教育」しかなかった。教会や学校によって積極的に性教育が唱えられたが、この時期にヴィネケンも性教育を考えていたと思われる。

72) Koedukation und Sexualerziehung. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 55.

彼によれば、男子校や女子校のような異性から常に離されて生活する教育現場の場合、その生徒は自分の性的志向を歪め、それを必要に迫られて同性に向ける事態に陥るのだという。このように、同性に向けられたエロスが、自分の性的志向を抑圧しながら行われた場合、それが長く続くと、自分の性的志向を見失ってしまったり、性的本能を強制的に他者に向け、暴力に発展させてしまったりする可能性がある。それに対して共学には、彼にとって、誰もが自分の性的志向にあった関係を築くことができるという利点があった。それは異性愛に限らず、同性愛も含まれている。家庭教育と学校教育では、それが家庭であることからすでに「異性愛」が前提にされているが、本来的に「自然な関係性」とは、自分の決断によってのみ相手を選べることにあり、そうヴィネケンは述べるのである。

それゆえヴィネケンは、男子のみの教育を批判し、人類全体の教育を考えるにあたり、男女を同時に教育することの利点を提示する。例えば、「(男女の) 共同教育」は、真と善を受け取る器官を2倍にする」とか、教育を「教師と生徒の間の生きた対話として扱うならば、男女が一緒にいるときの方が2倍豊かで実りあるものになる」<sup>73)</sup>と述べる。そして、女性も社会進出できる教育の必要性を訴えるのである。

その教育はいかにして可能なのだろうか。ここで、先に述べたヴィネケンの「客観精神」論が活きてくる。彼の「客観精神」論によれば、「文化の直接的な担い手になるための器官はただ一つ、言語」<sup>74)</sup>である。つまり、彼によれば言語を用いる存在であれば、誰もが客観精神に奉仕し、文化創造に貢献できるのである。したがって、彼は、女性を教育することの意義を、「客観精神」論から導き出し、以下のように述べる。

個人の精神があるところには、客観精神の働きに協力しようとする努力も生きている。そこには、知識に対する本能、美に対する受容性、

73) Koedukation und Sexualerziehung. In: Wyneken, a. a. O., 1913, S. 44.

74) Die Idee des Geschichtsunterrichts (Vergangenheit und Gegenwart I, 1911). In: Wyneken, a. a. O., 1919, S. 51-52.

正しいことや良いことをしようとする意志が息づいているのだ。この女性(das Weib)の才能をどう思うかは人それぞれだろう。彼女の中にも精神が生きていることは否定できない。<sup>75)</sup> (ドイツ語引用は筆者)

このようにヴィネケン は、女性もまた客観精神の担い手になることを主張している。ここから、女性の社会進出が進まない現状を問題視して、現状の社会および既存の価値観を批判する。そして、彼は以下のように力強く言い切る。

たとえ女性の実際の運命が生物学的なものであったとしても、女性だけが動物や奴隷以上の存在となり、意識的に自分の運命に身を捧げる人間であり、人間の同志となる。<sup>76)</sup>

そのような女性は「未来の女性」<sup>77)</sup>である。このようにヴィネケン は、女性が客観精神へ奉仕することで、人間社会＝男性社会に参入できると考えた。こうしてヴィネケン は、女性に対して「人類のもっとも神聖な事業における仲間であった」と位置づけたうえで、女性が新しい文化を創造するという使命を貫徹する仲間であったという記憶が、男性社会において男性が女性を抑圧するという構造（「両性の社会的闘争」<sup>78)</sup>）を解消する糸口になるとした。そして、そのような記憶をもたらし教育こそ、男女共学であると宣言するのである。このようにヴィネケン は、女性も客観精神に参入できると考え、万人に、客観精神に奉仕する存在者である若者になることを求め、そのために男女共学の学校を必要としたのである。

まとめよう。ヴィネケン の「客観精神」論は、個人が言語を用いて客観精神に向かえば、どんな人間であっても、精神文化の創造に貢献できる理論である。なかでもヴィネケン は「青年期」を、理想主義や精神的な価値

---

75) Wyneken: a. a. O., 1913, S. 45.

76) Ebd., S. 46.

77) Wyneken: a. a. O. S. 46.

78) Ebd., S. 47.

を追求する「繊細さ」を持つロールモデルとして提示している。つまり、若者は、精神的な価値を目指す存在者であり、年齢に関係なく、若さを持つ状態である。また、この若者は、男女の両方を含むものであり、特に女性には「未来の女性」であった。新しい文化の創造という仕事に若者たちが参加することによって、既存の社会が刷新され、特に男性社会が持つ男性が女性を抑圧する構造が解消されると考えたのであった。それゆえ、ヴィネケンにとっては言語を用いた「若者」による客観精神への奉仕が文化の創造の絶対条件になるのである。しかし、このようなヴィネケンの男女共学の目的があるにも関わらず、先の(1)と(2)でみた問題を踏まえると、ヴィネケンの理論では女性文化も若者文化も形成できない可能性は十分に推測可能なのである。

### 第3節 戦争賛美と女性性の排除

ヴィネケンの理論は、どのような結末を辿ったのだろうか。これまで、近代教育の「アンチノミー」として定義された問題に対するヴィネケンの応答を見てきた。第3節では、まずヴィネケンの「客観精神」論がその帰結として、若者を全体に統合しようとし、戦争に駆り立てたことを見て行く(1)。次に、男女共学論の帰結が、実際には、男性同士のホモセクシュアルな関係性に変容していく様を確認する(2)。ここから、ヴィネケンの理論は「客観精神」論でみられたように、大きな全体あるいは目的のために社会的弱者の犠牲を伴う性向をもったものであったこと、つまり、画一化の暴力をはらむものであったことを明らかにできるだろう。本節では、ヴィネケ『戦争と若者』(1914)を、先行研究でほとんど顧みられてこなかった「戦争と学校」(1915)も補助線として見ることで、ヴィネケンがなぜ戦争を求めたのかをより明確に示したい。

#### (1) 若者の自己犠牲と戦争賛美

これまで見てきたように、若者の使命は「客観精神に奉仕すること」だった。これは、青年期が理想や精神的価値を追求できる時期にあるために、若者は、新しい文化、特に彼ら独自の文化である「若者文化」を創造できると考えられたからである。この若者文化は、ベンヤミンの世代にとって、「青



春」や「若さ」という言葉で表現されるものだった。こうしたある一つの方向や価値観に若者を向かわせる際に、この若者文化の内実が語られていないという問題があったことは、すでに示した通りである。『戦争と若者』において、「奉仕」という言葉は、戦争に対して用いられるようになる。

君（若者）たちは、我々を失望させてはならない。君たちの中に、国家権力だけが戦争に奉仕させる者、分裂した心で戦争に奉仕する者だけは、あってはならないのだ。君たちのうちにある安っぽい理性の声に耳を傾けてはいけない。そうではなく、むしろ、君たちの若い血の声に耳を傾けるのだ。<sup>79)</sup>

若者に求められたのは、自らのうちにある「若さ」に奉仕することによって、戦争に向かうことであった。ヴィネケンによれば、この戦争によって「惰性と臆病」は克服されるのであり、「大きな献身と犠牲をいとわない精神」を経験する「栄光とヒロイズム」<sup>80)</sup>が若者に与えられる。そのために若者が戦場で倒れるとしても、「私たちは、あなたの勇ましい死（Heldentod）に、私たちの青春への信頼のあかしを見たいと思う」とだけ述べ、この若者の死こそが、「なおいっそうの（祖国の）助けになる」<sup>81)</sup>と断言するのである。この「若さ」や「青春」は、ベンヤミンを含めたヴィネケン派の若者たちが、新しい文化を求めて、そして自分たち独自の文化を求めて掲げたものだった。同時に、彼等を改革教育運動につなぎ留めておくためのものでもあった。しかしその旗印は、若者の価値を国家や社会に再認識させるものだったのである。<sup>82)</sup>

だが、ヴィネケンによれば、戦争がもつメリットは若者の価値を社会に

---

79) Gustav Wyneken: Der Krieg und die Jugend. München, 1914, S. 12.

80) Ebd., S. 12.

81) Wyneken: a. a. O., 1914, S. 13.

82) このことは、「戦争と学校」（1915）においても述べられている。「戦争の結果として最初にそして最も重要なことは、若者の変化した評価である」。(Gustav Wyneken: Der Krieg und die Schule. In: Wyneken, a. a. O., 1919, S. 83.)

再認識させるだけにととまらない。確かに、これまでの彼の主張では、見てきたように、国家が個人に干渉することではなく、個人が国家を形成するという一方向的な関係が主張されてきた。しかし、このような国家が国民の内部に干渉しないという前提は、戦争によって覆されるのである。それは、「国家とは国民全体」であるという定義に現われる。『戦争と若者』において、ヴィネケンは、「戦争や戦争状態は、人々の構造に介入するものとなり、その内部を一時的に変容させるものとなった」<sup>83)</sup>と述べる。つまり、国家が変容する事態がそのまま、国民の変容に繋がるのである。

このように「新しい文化の創造」は、今や戦争による国家および国民の変容に置き換えられ、若者が重要な担い手と考えられることになる。しかも、ここで想定されている若者とは一つの国家に従属する同質の集団に転落しているのである。さらに、上述したように、こうした若者による疑似国家の形成を主張するヴィネケンの論は、『戦争と若者』において、兵士による祖国「ドイツ帝国」の形成に変更されるのである。前節で述べたヴィネケンの「客観精神」論が、同質的な道德観を持った国民を要請していたことは見てきた通りである。ここで、彼は、道德によって国家の内部が占められる国家状態を、現実に対応しないがしかし実現が望まれていた「客観精神」とパラレルに考えるのである。すなわち、客観精神に向かう人間の集団は、理性の国や文化の国を形成する。これは通常の国民国家とは異なるものだが、そこでは、きわめて同質性の高い集団が出現することは予想されよう。つまりヴィネケンは、客観精神の下に個人が集い、精神文化を生み出すような新しい国家を求めているのである。こうした若者による疑似国家の形成を主張するヴィネケンの論は、『戦争と若者』において、兵士による祖国「ドイツ帝国」の形成に変更されるのである。

このように戦争と国家を肯定する場合、以下のように、同質の男性による文化への参与が期待され、女性の参与が見落とされる。「戦争と学校」<sup>84)</sup>

83) Wyneken: a. a. O., 1914, S. 18.

84) 「戦争と学校」は、1914年11月25日のミュンヘンでの講演の一部である。この日にベンヤミンとヴィネケンの絶縁のきっかけとなった『戦争と若者』は公刊された。また、ヘルマン・リーツと同様に、グスタフ・ヴィネケンも

(1915)において、教育は、若者を社会全体に包含しようとする態度に変容する。

私たちの教育に求められるのは、若者を国家や社会の生活に知的かつ実践的に統合することである。<sup>85)</sup>

ヴィネケンは、これまで教育が抱えていたアンチノミーを解消する方法として、青年を国家や社会といった全体に統合するという教育を提示する。この「戦争と学校」における「青年」は、果たして女性を含むのかという問題について、Oelkersは、ヴィネケンが男子生徒を寵愛しており、自分の男子生徒に向かって話していたことを報告している。<sup>86)</sup>また、第一次大戦下には、女性兵士が戦場に赴くことはなかった。そのため、ここでの「若者」はすべて男性を指している。では、なぜヴィネケンは、戦争と若者を育成する学校とを結びつけたのか。

まとめれば、ヴィネケンの主張は、2点に集約されよう。第1に、戦場で若者が活躍すれば、若者（男性兵士）という新しい存在の価値が再認識され、総じて若者の価値が明らかにされること、第2に、戦争が既存の社会制度を破壊し、新しい文化の創造の足掛かりになるということである。この事態を彼は、戦場における教師と若者の「友情」がドイツを変革する端緒になると唱え、すべての若者が国家や社会に統合されることを望んだのである。

このようにヴィネケンは、青年が国家や社会といった「全体」に統合されることを主張し、戦争と学校の関係から新しい文化が生まれることを期待した。同時に、その新しい意志に反することを「裏切り」<sup>87)</sup>と位置付け、

---

兵役には志願しなかったが、彼は戦争を無条件に肯定し、ドイツの若者の英雄的な課題として提示していた。1914年11月25日、ヴィネケンは再びミュンヘンで戦争と若者をテーマにした上述の講演を行い、その中でドイツの若者の充当について述べている。Vgl. Oelkers, a. a. O., 2011, S. 237.

85) Gustav Wyneken: Der Krieg und die Schule. In: Wyneken, a. a. O., 1919, S. 87.

86) Vgl. Oelkers, a. a. O., 2011, S. 236-8.

87) Wyneken: a. a. O., 1914, S. 92-93.

第一次大戦へ若者を駆り立てたのである。この「裏切り」という文言は、ベンヤミンがヴィネケンに宛てた絶縁状における「裏切り」と綺麗な対をなしている。

あなたは、あなたの弟子たちが愛する女性に対して、恐ろしい卑劣な裏切りを犯しました。あなたからすべてを奪った国家に、あなたはついに青年たちまでも、犠牲として捧げてしまった。<sup>88)</sup> (強調は筆者)

ベンヤミンは、ヴィネケンが掲げていた男女共学の理想を信じていた。それは、社会的マイノリティである女性を含む若者が、自分たち自身の文化を持てるものと考えたからだ。しかし、これまでの分析から明らかなように、ヴィネケンも、若者の社会的地位が向上するのなら、戦争へ動員することを辞さなかった。<sup>89)</sup> それに対してベンヤミンは、戦争によってドイツ国民という名の男性が跋扈し、彼らの価値だけが強められる事態を恐れたのである。

## (2) 家庭の排除と少年愛

ここからは、『エロス』<sup>90)</sup> (1921)を含めて分析<sup>91)</sup>したい。この著作から

88) 『ベンヤミン・コレクション』 7, 358 頁。

89) この事態を Oelkers (2011) は、「ヴィネケンは、戦争はより高い目的のために行われ、その犠牲は正当化されると考えた」と見ている。Oelkers, a. a. O., 2011, S. 236.

90) ヴィネケンは、度々男子児童への性的暴行で告訴されている。1925 年にヴィネケンは経済部長としてヴィッカーズドルフへの復帰を許された。しかし 1931 年にヴィネケンがまた同罪で告訴されると、ヴィネケンは放校される。その時の 16 歳の生徒は、ベルリンでヴィネケンと暮らしていたようである。日常的にヴィネケンは生徒をアパートの自室に呼ぶなどの問題行動を起こしていた。このような歴史的事実からも、ヴィネケンが意図的に男子児童のみを優遇し、女子児童、女子生徒を遠ざけていたこと、女性を男性化しようとしていたことは想像に難くない。とはいえ本稿は、ヴィネケンの思想面に焦点を当てるものであるから、そこから導き出された結論が史料の実証に堪えないとしても、致し方ないことだと考える。詳しくは以下の 3 冊

は、ヴィネケンが男子生徒への性的暴行事件によって告発された事件の背景を知ることができる。1921年に弁明の目的で出版された『エロス』には、女性的なものとして子供や少女、そして母親、家庭の排除が描かれている。そして、それらを排除した理想的な空間としてFSGが賛美されているのである。

第2節(3)で見たように、男女共学の目的は、まずもって、家庭の古い価値観によって抑圧されていた少年少女たちに、自然な男女関係を可能にすることにあり、そこで「友情と同志の関係」を結ばせることだった。そのような関係が、両性の社会的闘争を解消する足掛かりになり、ひいては、新しい文化である「青年文化」の創造を実現するはずだった。しかし、そのような男女共学の理論は、家庭の排除を進めるがために、女性や子供の排除を主張するようになる。

民族や世紀を超えたあらゆる知識や習慣に反して、少年を不当に長い間、子供としてしか扱わず、実際に少年らしいものが何なのかを理解していないのは、我々の家庭教育の女性的な特徴に対応している。子供は女性に属し、男子は男性に属するものである（Dem Weib gehört

---

を参照されたい。Vgl. Jürgen Oelkers: Eros und Herrschaft. Die dunklen Seiten der Reformpädagogik. Weinheim und Basel 2011. 特に S. 241-2. には、どのような行為を行っていたのかの詳細な記述がある。Vgl. Peter Dudek: “Versuchssacker für eine neue Jugend“ – Die Freie Schulgemeinde Wickersdorf 1906-1945, Bad Heilbrunn 2009. Vgl. Thijs Maasen: Pädagogischer Eros. Gustav Wyneken und die Freie Schulgemeinde Wickersdorf. Berlin 1995. また、懲役1年の判決は後の控訴審で確定したが、ヴィネケンにはチューリンゲン法務省の恩赦により、この刑に服することはなかった。この恩赦の理由は明らかになっていないが、政治的な動機があったと推測されている（Vgl: Dudek, a. a. O., 2009, S. 286.）。

- 91) Oelkers (2011) は、ヴィネケンの個人的経歴を参照しないと『エロス』は読み解けないと主張する。簡単に紹介すれば、ヴィネケンには学生時代に男性の恋人がいたが、その恋人は、娼婦と一夜の関係を持ったことを後悔し、失踪（自殺）してしまった。突然、何も言わずに恋人を失ってしまったショックが、ヴィネケンの人生に大きな影を、それ以降の犯罪行為に影響を与えたことを指摘している。Vgl: Oelkers, a. a. O., 2011, S. 227-8.

das Kind, dem Mann der Knabe.。)<sup>92)</sup> (ドイツ語引用は筆者)

ヴィネケンによれば、Kind には「女性的 (feminin)」<sup>93)</sup>な響きがあり、それは青年とは区別される。家庭は、母性によって子供を保護しようとするが、この母性のゆえに、子供を子供のままにし、弱弱い存在にするのである。そして子供が弱弱しく女性的存在である場合は、かえって母性は子供を保護しようとするという円環構造が生じるため、家庭の持つ古い価値観は、変わりようがないのである。ヴィネケンは、「偉大な事業」という客観精神への奉仕を引き合いに出し、そのような文化の創造を行う人生に入ろうとする子供と母親の関係を次のように記す。

そして、ギリシア人はこの気づきを神話の中で最も美しく象徴している。夜中に目覚めた母親が、半神の血を引く我が子を揺りかごから連れ出し、竈の炎にかざし、卑しい地上のものをすべて焼き尽くす神を見るところから始まる。そして彼女は泣き叫び、浄化が完全に終わる前に、我が子を神から奪ってしまう。それはもう、選ばれた者の長く困難で苦しい英雄的人生によってしか埋め合わせられないのだ。<sup>94)</sup>

このように女性、特に母親は、子供を客観精神への奉仕に捧げることはなく、もっぱらそれを止める否定的存在として描かれている。以前からヴィネケンが家庭を批判したのは、家族制度が、これまでの古い価値観を維持し、それに同化させることにのみ貢献する制度だと理解したからであるが、今や彼は、子供や女性もまた、古い価値観を助長し維持する存在だと見なしているのである。こうして家庭的な要素を排除するため、FSGを創り、少年少女を隔離することになる。このFSGでは、子供らしさや女性らしさといったものは余分であり、もっぱら少年少女を男性らしくすることが求められたのである。

92) Gustav Wyneken: Eros. Lauenburg u. Elbe 1921, S. 51.

93) Ebd.

94) Wyneken: a. a. O., 1921, S. 59.

ここから、家庭の排除のために女性性を排除しようとした理由が判明する。それは、女性が力強い男性的存在になることによって、家庭が持つ母性に代表される古い価値観が消えると考えたからである。FS Gは「7人の教師、1人の女性教師、18人の男子生徒と1人の女子生徒」<sup>95)</sup>から始まった。しかし、これは矛盾しているようだが、ヴィネケンが校長を勤めている時期、教師も寝食を共にする寄宿制の学校であるにもかかわらず、女子生徒が同じ宿舎で暮らすことはなかった。<sup>96)</sup>彼は男女共学を心掛けていたが、このように、一方では女性を学校に引き入れ、他方ではfeminisch（女性的）なものの一切を拒もうとしていた。そして女性には、ただ男性を見て、男性的になることが望まれたのである。それゆえ、以前まで男性と女性の中性的な存在者として定義されていた「若者」は、今や全く女性的ではない存在だと言えるのである。これでは、「若者文化」には女性の要素が含まれていないことになるであろう。

これに加えて、ヴィネケンは、奇妙にも同性愛を推奨するようになる。その理由は何だったのか。ヴィネケンが男性同士の愛を強調するのは、第1に、男性が「少年と同じ魂の性質で生きて」おり、「賢くて高貴な少年に、女性には決して理解できないことをたくさん教える」ことができるからである。<sup>97)</sup>第2に、彼にとって、Päderastia（少年性愛）には利点があったからである。前者について、ヴィネケンは、男性の愛と女性の愛を分けて考えている。男性の愛の性質は、「女性への愛に比べ、性本能の眩惑や熱狂にさ

---

95) Vgl. Meike Sophia Baader: Blinde Flecken in der Debatte über sexualisierte Gewalt. Pädagogischer Eros und Sexuelle Revolution in geschlechter-, generationen- und kindheitshistorischer Perspektive. In: Werner Thole (Hg.): Sexualisierte Gewalt, Macht und Pädagogik. Budrich u. Opladen 2012, S. 84-99.

96) „Aufnahme-Bedingungen und Mitteilungen der Freie Schulgemeinde Wickersdorf“(1910)には、女兒の寝巻（Nachthemden）に関する規定がある（S. 5）（パンフレットのため出版社は不明）。しかし、1906から1910年、ヴィネケンがSchulleiterとして勤めているときに、女子生徒が同じ宿舎で暮らしていた記録はない。

97) Wyneken: a. a. O., 1921, S. 46.

らされることが少ない」からこそ「自律性」<sup>98)</sup>がある。それゆえ彼は、性的本能が「女性にのみ向けられることは、無駄な消費であり、それだけでなく男性の手ほどきみたいなのをすることが、少年を救済することだ」<sup>99)</sup>と断言するのである。後者について、Päderastiaは、古代ギリシアにおける道德教育であり、それが、古代ギリシアの豊富な文化を生み出したと解釈している。<sup>100)</sup>つまり、ヴィネケンにとって少年愛は永続的な愛を保証するものであり、これが古代ギリシア文化を生み出したように、新しい文化の創造の足掛かりになると考えたのである。ここでも、男女共学であるにも関わらず、女性が排除されている。そして、ここで述べられている文化は、あくまでPäderastiaなのである。では、このように家庭を排除し、女性性を排除した理想的な空間であったはずのFSGは、本当に理想的な文化創造の場だったのだろうか。

このような少年愛の奨励の帰結は、ヴィネケン自身の逮捕というものだった。これまで、青年と指導者の関係もまた、お互いを「同志」(Kamerad)と見なすということを見てきた。それは、たとえ両者が塹壕のなかにいるとしても果たされるものだった。しかし、このKameradschaftlichkeitという言葉は、『エロス』では全く別の意味で用いられる。

二人の少年は、私が彼らをととても愛しており、彼らもまた私をととても愛していると証言している。(…)その後、特別なケアをしたのだが、その判断に私は納得がいかない。私は彼らを「仲間 (Kamerad)」として迎え入れた。(…)彼(そのうちの若い方、12歳の少年)は、私の部屋の片付けや、それに類する愛の労働を引き受けてくれたので、

98) Ebd. S. 46.

99) Wyneken: a. a. O. S. 48.

100) Maasen (1995) は、ヴィネケンのギリシア賛美が、ヴィルヘルム体制下におけるドイツのギリシア化の流れと一体であったことを示している。このヴィネケンの傾向はまた、ワイマール共和国におけるギリシア化の流れとも共振している。Ebermayer (1929) は、彼の著作 Erich Ebermayer: Kampf um Odilienberg, Berlin/Wien/Leipzig 1929. において、ヴィネケンのギリシア賛美が一貫してことを報告しているという (Vgl: Maasen, a. a. O., 1995, S. 69.)



特に私の心に近い、私の側近と呼ばれた親愛なる立派で誠実な少年たちと一緒に、私の仲間になった。しかし同時に、私との親しい関係を、好意として楽しむのではなく、信頼、無私、忠誠によって、模範的行動でそれを獲得し、返済するという重大な決断もしたのである。<sup>101)</sup> (ドイツ語引用は筆者)

ここで言われている特別なケアとは性行為のことだが、ヴィネケンは、彼らを「仲間」として受け入れることをそう呼んでいた。言い換えるなら、彼の言う「仲間」は、成人男性と少年とのエロティックな関係を指しているのである。当初、ヴィネケン、男女が互いを、客観精神への奉仕という目的を遂行するための仲間 (Kamerad) として認め合い、そのような理想的な状態を彼ら青年たちに提示できる指導者のリーダーシップを求めているが、それらは単に、男性同士の同性愛の関係に置き換えられてしまっているのである。しかもこれは、成人男性から少年へ向けられた友情であり、理想を体現しようとする指導者が自らに募る青年たちに向けた互恵的な (相互に求めあう) リーダーシップとは様相を異にしているのだ。<sup>102)</sup>

## おわりに

ヴィネケンの主張した新しい文化とは、何よりも Päderastia であり、男性同盟的な文化であった。そうなれば当然、女性も女性性も、子供も、そこからは排除される。だとすれば、ヴィネケンの青年文化論は、青年文化や女性文化を創造するものではなく、多様性を確保するものでもなく、彼ら社会的マイノリティを抑圧するものだった。例えば、ベンヤミンは、青年や女性が社会的に抑圧されている状況を鑑み、その言葉を代弁してくれる指導者として、ヴィネケンを慕っていたが、実際にヴィネケンが主張し

---

101) Wyneken: a. a. O., 1921, S. 32.

102) この事態を Dudek (2009) は、ヴィネケンの FSG での目的が、「同志愛とリーダーシップに基づくはずの師弟関係を、友情のエロティックな関係と表現した師弟関係に再定義すること」だったと解釈している (Vgl: Dudek, a. a. O., 2009, S. 79.)。

たことは、男性性一色の社会だったのである。一方では、女性を男性社会に引き入れようとし、他方では、女性の存在を拒もうとする。最終的には、青年存在という男性的な兵士を国家に統合することによって、より男性同盟的な社会の基盤を整えたのである。これは、女性であっても文化を創造できるとしてヴィネケンの下に集った女性たちへの明確な裏切りでもあり、近代教育批判者としてのヴィネケンを支持していた若者たちへの裏切りでもあったのである。

# The Dangers of Gustav Wyneken's Theory of Coeducation

Focusing on the Connection between the Theory of  
“Objective Spirit” and the Theory of War

SAGAE, Noboru

Gustav Wyneken (1875-1964) was an educational activist during the German reform education movement and a leading figure in the rural education house movement. It is well known that one of his students was Walter Benjamin. Among Wyneken's educational reforms, coeducation in boarding schools and its theories were controversial and influential at the time. He developed an educational theory based on Hegel's thought, and based on this theory, he founded the “Wickersdorf Free School Community,” the first “coeducational” boarding school in Germany. However, Wyneken's coeducation theory was not something that could be evaluated from a gender perspective. Rather, it was exclusionary rather than inclusive of femininity, and at the same time, it had a dangerous aspect that aimed at masculinizing women and thus creating soldiers. This paper reconstructs, from Wyneken's actual actions and the intrinsic interpretation of his theory, the dangers of his theory and the reactions to his theory at the time.